

総説

ヘルスコミュニケーション学の研究方法論の探究  
—これからの 10 年に向けて  
Exploring Research Methodologies for  
Health Communication in the Next Decade

木内貴弘<sup>1)</sup>、奥原剛<sup>1)</sup>、上野治香<sup>1)</sup>、岡田宏子<sup>1)</sup>、石川ひろの<sup>2)</sup>、  
高永茂<sup>3)</sup>、中山健夫<sup>4)</sup>、高山智子<sup>5)</sup>、河村洋子<sup>6)</sup>、加藤美生<sup>2)</sup>  
Takahiro Kiuchi<sup>1)</sup>, Tsuyoshi Okuhara<sup>1)</sup>, Haruka Ueno<sup>1)</sup>, Hiroko Okada<sup>1)</sup>, Hirono Ishikawa<sup>2)</sup>,  
Shigeru Takanaga<sup>3)</sup>, Takeo Nakayama<sup>4)</sup>, Tomoko Takayama<sup>5)</sup>, Yoko Kawamura<sup>6)</sup>, Mio Kato<sup>2)</sup>

- 1) 東京大学大学院医学系研究科医療コミュニケーション学分野
- 2) 帝京大学大学院公衆衛生学研究科
- 3) 広島大学大学院文学研究科
- 4) 京都大学大学院医学研究科健康情報学分野
- 5) 国立がん研究センターがん対策情報センター
- 6) 静岡県立文化芸術大学文化政策学部

- 1) Dep. of Health Communication, Graduate School of Medicine, The University of Tokyo
- 2) School of Public Health, Teikyo University
- 3) Graduate School Letters, Hiroshima University
- 4) Dep. of Health Informatics, Graduate School Medicine, Kyoto University
- 5) Center for Cancer Control and Information Services, National Cancer Center
- 6) Faculty of Cultural Policy and Management, Shizuoka University of Art and Culture

**Abstract**

It is important to explore research methodologies for health communication in the next decade because “fruits” of such research are required following its recent recognition as an independent academic field in Japan. Therefore, we adopted this topic as a theme for the 11th Annual Conference of the Japanese Association of Health Communication. We traced the history of the development of human communication, and identified three major research areas for health communication: interpersonal communication, document studies, and moving image studies. Next, we organized three symposiums focused on research methodologies corresponding to these areas. In addition, we asked Professor Masato Ishizaki (Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo) to give a keynote address. Professor Ishizaki was the best person to overview research methodologies for both expert and non-expert communication, not limited to the health area. We believed that these symposiums and the keynote address were of significant benefit for all participants to guide exploration of their research strategies in the next decade.

**要旨**

ヘルスコミュニケーション学が日本において独立の学問分野としての一定の認知を得た現在、今後に向けて一層の研究成果が要求されている。このため、これからの 10 年に向けて、ヘルスコミュニケーション学の研究方法論の探究を行うことは、非常に重要な課題となっている。そこで、これを第 11 回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会のテーマとして採用することにした。人類のコミュニケーションの歴史をたどって、対人コミュニケーション研究、文書研究、映像研究というヘルスコミュニケーション学の 3 つの主要な研究領域を同定した。そして、この 3 つの領域に対応した 3 つのシンポジウムを企画した。更にヘルスに限定されない専門家と非専門家との間のコミュニケーションを含めた研究方法論を俯瞰するために、東京大学大学院情報学環・学際情報学府の石崎雅人教授に基調講演を依頼した。これらの企画は、ヘルスコミュニケーションの研究者が次の 10 年に向けて、自らの研究戦略を立てるために非常に有益であると考えている。

キーワード：研究方法論、ヘルスコミュニケーション、対人コミュニケーション、文書、映像  
Keywords: research methodologies, health communication, interpersonal communication, document, image

## 1. はじめに

日本ヘルスコミュニケーション学会設立から 10 年が経過し、その間歴代の学術集會会長の創意工夫による様々なテーマのもとで毎年学術集會が開催されてきた(表 1)。設立当初は、当時数少なかったヘルスコミュニケーション関係の研究を行っている研究者による招待講演を中心に運営せざるを得なかったが、徐々に一般演題の比重が増え、現在は一般演題を中心に運営されるようになってきている[1]。学術集會の発表件数、参加者数は、毎年着実に増加を続けており、第 11 回学術集會では、発表件数 73 件、参加者数 250 名以上(その他に、台風等のため事前登録をしたが参加しなかった方が約 30 名)に達している。また発表の内容も対人コミュニケーションから、マスコミ、インターネット等のメディアコミュニケーション、ヘルスキャンペーン、異文化コミュニケーション、医学教育等と多岐にわたっており、日本におけるヘルスコミュニケーション学研究の発表の場として、主導的な

表 1. 日本ヘルスコミュニケーション学会学術集會(研究会)の開催記録とテーマ

2009 年 第 1 回研究会(東京大学 木内貴弘)
医療系大学等におけるヘルスコミュニケーション教育—現状及びその意義と役割
2010 年 第 2 回研究会(京都大学 中山健夫)
ヘルスコミュニケーションの現状と展望:対人コミュニケーションから異文化コミュニケーション、マスメディア・キャンペーンまで
2011 年 第 3 回学術集會(九州大学 荒木登茂子)
大災害とコミュニケーション
2012 年 第 4 回学術集會(慶應義塾大学 杉本なおみ)
健康と医療をめぐるコミュニケーション —実践知を学問にすすめるために—
2013 年 第 5 回学術集會(岐阜大学 藤崎和彦)
ヘルスコミュニケーション教育の現状と未来
2014 年 第 6 回学術集會(広島大学 小川哲次)
地域文化とヘルスコミュニケーション
2015 年 第 7 回学術集會(西南学院大学 宮原哲)
「コミュニケーションから見たヘルス」～今さら聞けない、でも気になる関係～
2016 年 第 8 回学術集會(国立がん研究センター 高山智子)
人と人がわかり合うには —「生」が放つコミュニケーション
2017 年 第 9 回学術集會(京都大学 中山健夫)
共に変わり、共に創る:ヘルスコミュニケーションの「力」
2018 年 第 10 回学術集會(九州大学 萩原明人)
国際化とコミュニケーション
2019 年 第 11 回学術集會(東京大学 木内貴弘)
ヘルスコミュニケーション学の研究方法論の探究

役割を果たしている。近年、日本において、ヘルスコミュニケーション学の意義や重要性についての理解が進み、他の分野の研究をしていた研究者がヘルスコミュニケーション学研究に参入するようになってきている。ヘルスコミュニケーション学は日本国内において一定の認知を得たと考えてよいと思われる。

第 11 回学術集會は、「ヘルスコミュニケーション学の研究方法論の探究」をテーマとして、基調講演、シンポジウムが企画され、幸いにして好評を得ることができた[2]。本総説論文では、まず、なぜ今この時期に「ヘルスコミュニケーション学の研究方法論の探究」が必要かつ重要であり、それゆえ第 11 回学術集會のテーマとして採用することにしたかについて論じる。

次にこのテーマに基づいて、第 11 回学術集會で行われた基調講演と 3 つのシンポジウムという具体的な企画に落とし込んだ経緯と背景について論じる。この中で、どのようにしてシンポジウムの講演、発表者が選ばれたかについても解説する。なお、基調講演と 3 つのシンポジウムの詳細な内容は、別個に各々 4 本の総説論文として、本総説論文の掲載されている日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌第 11 巻 1 号に掲載されているので、本総説論文では取り扱わない[3-6]。

## 2. 学術集會のテーマの設定について

今回、当教室で学術集會開催を引き受けるにあたって、ヘルスコミュニケーション学の次の年 10 年の課題として、まず思い浮かんだのが研究方法論であった。ヘルスコミュニケーション学が一定の程度の認知を得た今日、次の目標は研究成果の充実にあり、このために研究方法論を探究することが非常に重要であると考えたからである。ヘルスコミュニケーション学の研究対象、研究方法論は、非常に多様であり、このため、ヘルスコミュニケーション学会には、臨床医学、公衆衛生学、コミュニケーション学、社会学、言語学、情報科学、心理学、社会心理学、マーケティング論等の様々な研究者が集まっている。このことは、ヘルスコミュニケーション学の学際的な性格をよく表しており、これらの様々な分野の専門家が集うことによって、化学変化がおき、次のイノベーションにつながる事が期待されている。無論、このようなヘテロな集団においては、異文化間コミュニケーションという課題も発生しがちであるが、今まで会員の努力により、大きな争いに発展することはなく、乗り切ってきた。ヘルスコミュニケーション研究の発展のためには、様々な分野の研究方法論について、お互いの知見やノウハウを共有して、各研究者が有している研究方法論と、他の研究者が有している多様な研究方法論とを、比較検討、取捨選択、融合して、新たに有用な研究方法論として展開していくことが望まれる。このため、現在有しているお互いの研究方法論について、広く共有するために研究方法論をテーマとして取り上げることにした。

ヘルスコミュニケーション学において、問題が最終的

に解決されるということはほとんどない。生物学において、決定的な実験によって、今まで謎であった問題が解決することや、臨床医学において、大規模で質の高い臨床試験により、積年の論争が決着することがある。しかしながら、ヘルスコミュニケーション学では、正解は通常 1 つではなく、このようなはっきりとした白黒はつけられない。その研究方法論も最終的に確立してしまうということはないと想定される。そこで、テーマは「ヘルスコミュニケーション学の研究方法論の確立」ではなく、よりよい方法論を目指して努力する過程が永続することを念頭に「ヘルスコミュニケーション学の研究方法論の探究」とした。

### 3. テーマから具体的な企画へ

「ヘルスコミュニケーション学の研究方法論の探究」というテーマから、具体的な企画に落とし込むために、人のコミュニケーションを歴史的にたどることによって、ヘルスコミュニケーション学の重要な研究分野を 3 つ特定した。コミュニケーションは、ヒトの進化の上で、まず非言語コミュニケーションとして始まり、言語の誕生によって、言語と非言語による対人コミュニケーションがなされるようになった。そこで、下記のようにまず対人コミュニケーション、それも特に会話を主体としたコミュニケーション研究の方法論を取り上げることにした (表 2) [3]。対人コミュニケーションは、コミュニケーションにおいて、もっとも古くて、基本的なもので、あらゆるコミュニケーションを考えるうえでの基礎となっていると考えたからである。

対人コミュニケーション研究の方法論は数多くあり、そのすべてをこのシンポジウムで取り上げることは到底できない。また、重要なのは単に方法論を並べて紹介することではなく、どのような目的のためにその方法論やアプローチが用いられたのかを研究の文脈に即して議論することである。シンポジウム 1 では 3 名の研究者を招いて、①「そこで何が起きているのか」を明らかにしようとする質的・記述的な研究 (会話分析)、②「どのよう

表 2. シンポジウム 1「医療における対人コミュニケーション研究のアプローチ」

座長：石川ひろの (帝京大学)、高永茂 (広島大学)
川島理恵 (京都産業大学国際関係学部准教授) 「医療場面における意志決定過程のコミュニケーション：会話分析的アプローチでみえること」
野呂幾久子 (東京慈恵会医科大学教授) 「機能分析 (RIAS) によるアプローチ」
藤森麻衣子 (国立がん研究センター社会と健康研究センター室長) 「コミュニケーションを変化させる：医師に対するコミュニケーション・スキル・トレーニングの有効性評価」

な要因がアウトカムとどの程度関連するのか」という関連性を量的に示そうとする研究 (機能分析：RIAS)、③「教育的介入によって変えられるのか」という教育の効果を明らかにしようとする研究 (コミュニケーション・スキル・トレーニングの無作為化比較試験) を取り上げた。各々について造詣の深い、①京都産業大学の川島理恵准教授、②東京慈恵会医科大学の野呂幾久子教授、③国立がん研究センターの藤森麻衣子室長に講演をお願いした。

その後、文明の発展により、文字の使用が始まり、文書が誕生した。文書を介して、直接対面していなくても、多くの情報を数多くの人に伝達可能となり、また長期にわたる記録の保存が可能となった。文字による文書の発明と普及は、人類の進歩・発展のための大きな原動力となった。そこで、次に文書の方法論を取り上げることにした (表 3) [4]。

シンポジウムの演者については、まず文書の可読性 (readability) の研究に取り組みリーダビリティ分析を行ってきた東京財団政策研究所の酒井由紀子シニア・マネージャーに講演を依頼した。次に患者向けに分かりやすい医薬品情報の開発を行ってきた京都薬科大学の北澤京子客員教授に講演を依頼した。また、文書を作成する立場から、国立がん研究センターで一般向けのがん情報のコンテンツ開発を行ってきた早川雅代室長に講演を依頼した。最後に、医療ジャーナリズム文書を作成し、届ける立場から、医療情報の背景にある利益相反 (COI) を巡る問題を指摘した医療ライターの西村多寿子氏に講演を依頼した。

時代は遙か過ぎ、19 世紀末になって、フィルムによる映画が誕生して、映像が記録できるようになった。20 世紀初頭にはトーキー映画が誕生 (音のない無声映画に対

表 3. シンポジウム 2「医療情報をどう作り、どう届けるか～文書に関する研究アプローチ」

座長：中山健夫 (京都大学)、 高山智子 (国立がん研究センター)
酒井由紀子 (東京財団政策研究所政策データラボシニア・マネージャー兼研究員) 「ヘルスコミュニケーションにおける方法論としてのリーダビリティ研究」
北澤京子 (京都薬科大学 客員教授) 「Shared Decision Making を促す患者向け医薬品情報」
早川雅代 (国立がん研究センターがん対策情報センター がん情報提供部医療情報コンテンツ室室長) 「患者向け医療情報ではどのような文章表現がよいのか～がん情報作成経験より」
西村多寿子 (医療ライター・翻訳者、プレミアム医学英語教育事務所 代表) 「医療福祉ジャーナリズム学」研究の一事例～デオバン事件と臨床研究法成立の関係に迫る～」

して、音が入っている映画をトーキー映画と呼ぶ)した。20 世紀中ごろには、電波によるアナログテレビ及びアナログビデオテープが実用化された。20 世紀も終わりに近づくようになると、テレビはデジタル化されて、高画質になり、DVD、Blue-Ray 等のメディアの形でも提供されるようになった。最近では、インターネットによるオンデマンド型の映像配信が本格化している。

文書が人の理性や想像力に訴えるのに対して、映像は感情に直接かつ強力に訴えて、人を動かすことができるのが大きな特徴となっている。このため、映像を活用したヘルスコミュニケーションは、非常に重要な役割を果たすと考えられる。そこで、3 つ目として、ヘルスコミュニケーションの映像の研究方法論を取り上げることにした (表 4) [5]。

シンポジウムの演者であるが、まず映像を創る立場から健康医療情報番組の制作を数多く行ってきた NHK の市川衛氏に講演を依頼した。渡邊清高氏は、医療者の立場で新聞を中心にマスコミの健康医療に関する報道の分析を行ってきた。特に科学的指標を用いて、文字情報の医療報道を分析してきた経験から、同じ指標の映像報道への応用の可能性について講演を依頼した。また、健康医療に関する映像分析は日本ではほとんど行われてこなかったため、健康医療に限定せず一般に映像分析の研究を行ってきたという立場で、早稲田大学の伊藤守教授に講演を依頼した。

上記 3 つのシンポジウムに加え、ヘルスコミュニケーション学の研究方法論を俯瞰するために、もっと一般的

表 4. シンポジウム 3 「映像を創る、映像を分析する」

座長：河村洋子 (静岡県立文化芸術大学)、 加藤美生 (帝京大学)
市川衛 (NHK 制作局チーフディレクター) 「「バズる」「心を動かす」映像のヒミツ～テレビ・ネットを中心に」
渡邊清高 (帝京大学内科学講座腫瘍内科・准教授、メディアドクター研究会代表) 「医療健康報道の質を探る－メディアドクターで記事を「科学」する」
伊藤守 (早稲田大学教育・総合科学学術院教授) 「ヘルスコミュニケーションと映像メディア：映像分析の視点から」

表 5. 基調講演

座長：木内貴弘 (東京大学)
石崎雅人 (東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授) 「ヘルスコミュニケーションにおけるコミュニケーションとディスコミュニケーションの相互作用－医療情報の在り方の観点から－」

に専門家と非専門家のコミュニケーションの視点から、長年にわたって医療・法・社会・芸術等の様々な領域で専門家と非専門家のコミュニケーションの研究を行ってきた東京大学大学院情報学環・学際情報学府の石崎雅人教授に基調講演を依頼した (表 5) [6]。

#### 4. 考察

本論文では、第 11 回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会テーマの選定及び基調講演とシンポジウムの企画立案の経緯等について解説を行った。本論文は、第 11 回学術集会の参加者及びこれをもとに編集された日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌特集号 (第 11 巻 1 号) の読者が各企画・総説論文の背景・経緯について深く理解するために参考となる。そして、今後のヘルスコミュニケーション学の研究戦略を立てるためにこれらを活用する際に役立つと考えている。

一般に学術集会のテーマやプログラム・抄録は、後世に末永く残るが、テーマの選定や企画の経緯や背景について、学術集会を企画する立場の関係者がどのように考えたかについては記録が残ることは少ない。学問の歴史を後世の研究者が考察する場合に、テーマや企画の背景にあった時代背景や暗黙の前提を検討することは非常に重要であり、本総説論文はこのために有益な資料となりうると考える。今後、このような試みが、日本ヘルスコミュニケーション学会で継続して行われることが必要であると考えている。

一方で、本総説論文には、あくまで第 11 回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会を企画した当事者が、「公式見解」として「公表した記録」であるという限界があるのも確かである。しかし、現代及び後世の研究者は、本総説論文以外の他の資料 (他の文献、インターネット上の情報、生存している関係者の証言) を併用することも可能であり、本総説論文の価値がこのためになくなってしまおうということはないと考えている。

#### 5. 結語

本総説論文では、第 11 回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会テーマの選定及び基調講演とシンポジウムの企画立案の経緯・背景等についての概説を行った。本総説論文のように学術集会の企画の経緯・背景等を記述して、現代及び後世の研究者に伝える試みは重要であり、今後も継続して実施されるべきであると考えた。

#### 謝辞

日本ヘルスコミュニケーション学会の世話人、運営委員をはじめとする会員各位、及び第 11 回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会の座長、発表者をはじめとする参加者各位のご支援・ご協力により、第 11 回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会が盛会のうちに無事終了したことを深く感謝します[2]。また学術集会の準備・当日の運営にあたって快く働いてくれた東京大学大

学院医療コミュニケーション学分野、帝京大学大学院公衆衛生学研究科の大学院生、東京大学医学部附属病院大学病院医療情報ネットワーク (UMIN) センターの関係者に心から感謝します。

#### 研究資金

本研究に関連した資金提供はない。

#### 利益相反自己申告

開示すべき利益相反はない。

#### 引用文献

[1] 学術集会. 日本ヘルスコミュニケーション学会ホームページ

<http://HealthCommunication.jp/holding.html>

[2] 第 11 回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会ホームページ

<http://HealthCommunication.jp/jahc2019/>

[3] 石川ひろの、高永茂、川島理恵、野呂幾久子、藤森麻衣子. 医療における対人コミュニケーション研究のアプローチ. 日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌 2020; 11(1):13-20

[4] 高山智子、中山健夫、酒井由紀子、北澤京子、西村多寿子、早川雅代. 医療情報をどう作り、どう届けるか～文書に関する研究アプローチ. 日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌 2020; 11(1):21-28

[5] 加藤美生、河村洋子、市川衛、渡邊清高、伊藤守. 映像を創る、映像を分析する. 日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌 2020; 11(1):29-34

[6] 石崎雅人. ヘルスコミュニケーションにおける専門家と非専門家の架橋. 日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌 2020; 11(1):7-12

#### \*責任著者 Corresponding author :

木内貴弘 tak-kiuchi@umin.ac.jp